

「証人」

「良心に従って、真実を述べ、何事も隠さず、偽りを述べないことを誓います。」ドラマや映画で刑事裁判が行われる際、証人尋問の最初に出てくる台詞です。もちろん、これは実際の裁判でも行われる宣誓の言葉。「証人」とは、「事実を証明する人。証人。」のことです。日本の法律では、採用された証人は原則として拒否できないことになっています。もっとも、現実には裁判を経験した人はそれほど多くないでしょう。だから冒頭の宣誓は、どこか遠くの話のように聞こえてくるかもしれません。

イエスが十字架にかけられ、復活された後、40 日間にわたって弟子たちと共に過ごされたと聖書は記しています(「イエスは……、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」使徒言行録 1:3)。それも、「数多くの証拠をもって使徒たちに示し」た、と。

その一つが、今日の聖書箇所に出てくる「聖書を悟らせる」(ルカによる福音書 24:45)だったことは間違いありません。主こそが唯一の神であり、永遠を支配する方であるということ(「主は真理の神、命の神、永遠を支配する王。」エレミヤ書 10:10)。イエスがメシア(救い主)であること、苦しみを受ける＝十字架にかけられること、そして、三日目に死者の中から復活すること。旧約聖書を通して預言されていたことが今、ここで実現していることをわからせるために、イエスは弟子たちに語り続けられました。

時間は限られています。イエスは懸命に教えられていたに違いありません。一方、弟子たちの気持ちはどうだったのでしょうか。イエスの一所懸命さとは裏腹に、どこか遠くの話として聞いていたのではないか。大切なことはわかる。しかし、私たちには十分に時間があるのだと思い込んでいました。

今、朝の連続テレビ小説では、やなせたかしとその妻、小松暢の物語が描かれています。代表作「アンパンマン」はテレビアニメ化され、3 歳以下の子どもたちに絶大な人気を誇っています。

ところで、その主題歌の歌詞を意識したことはあるでしょうか。〈そうだ うれしいんだ 生きるよろこび たとえ 胸の傷がいたんでも なんのために生まれて なにをして生きるのか こたえられない なんて そんなのは いやだ!〉およそ乳幼児に向けた歌詞とは思えません。しかし、作詞したやなせは周囲の反対にもかかわらず、頑なにこの歌詞を押し通したといいます。幼少期から味わった肉親との死別や別れ、過酷な戦争体験、クリエイターとして苦闘した日々を経た、60 歳を過ぎてまだ次のクリエイティブに挑もうという、やなせたかしの青い心が伝わる歌詞です。でも、子どもたちはもしかしたら意味もわからずに歌い続けていたのかもしれませんが。ところが、東日本大震災の後、避難所でラジオから流れる「アンパンマンのマーチ」に多くの人が生きる力を与えられたといいます。大きな災害を通して改めて、「なんのために生まれて なにをして生きるのか」を問い直したのです。

弟子たちを取り巻く環境も一気に変化します。イエスは最後の説教を残した後、天に上げられます。彼らは改めて自分たちを問い直したはずで、「なんのために生まれて なにをして生きるのか」と。

そこで気づかされるのです。自分たちにはイエス・キリストと出会うことを通して、この出会いを次に伝える役割が与えられているということに。自分が人生の主役になるのではなく、「私を生かしている神」こそが主役であることを伝えるために招かれているということに(「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、」エフェソの信徒への手紙 4:1)。そして、神の招きは拒否できないということに。

だから、弟子たちは人生を賭して証言台に立ち続けました。しかも、弟子たちは一人ではありません。約束された聖霊が一人ひとりを支えているから、決して揺らぐことはありません(「主こそ王。……世界は固く据えられ、決して揺らぐことはない。」詩編 93:1)。「良心に従って、真実を述べ、何事も隠さず、偽りを述べないことを誓い」ながら、イエスを、キリストを宣べ伝えました。

私たちもまたこの弟子たちに連なる一人です。イエスのことを伝える「証人」として、今日も歩むのです。

